

師範學校編輯
小學讀本

川合隆一郎



明治七年八月改正

文部省刊行 一本

小學讀本 卷三

明治九年五月 神奈川縣翻刻



小學讀本卷之三

田中義廉 編輯
那珂通高 校正

第一

水ハ、動物、植物の養液ニシテ、地球上、尤要用のものあり、水をまきときハ、萬物生育することを得以水ニ止水、流水の別あり、池水、湖水を止水といひ、河水を流水といふ、湖水ハ、陸地全ク四面を環リ、中窪たる地ニ停たるとなり。

小學讀本 卷三 文部省

河水とハ山間の谿谷より湧き出で、海に注
をいふ

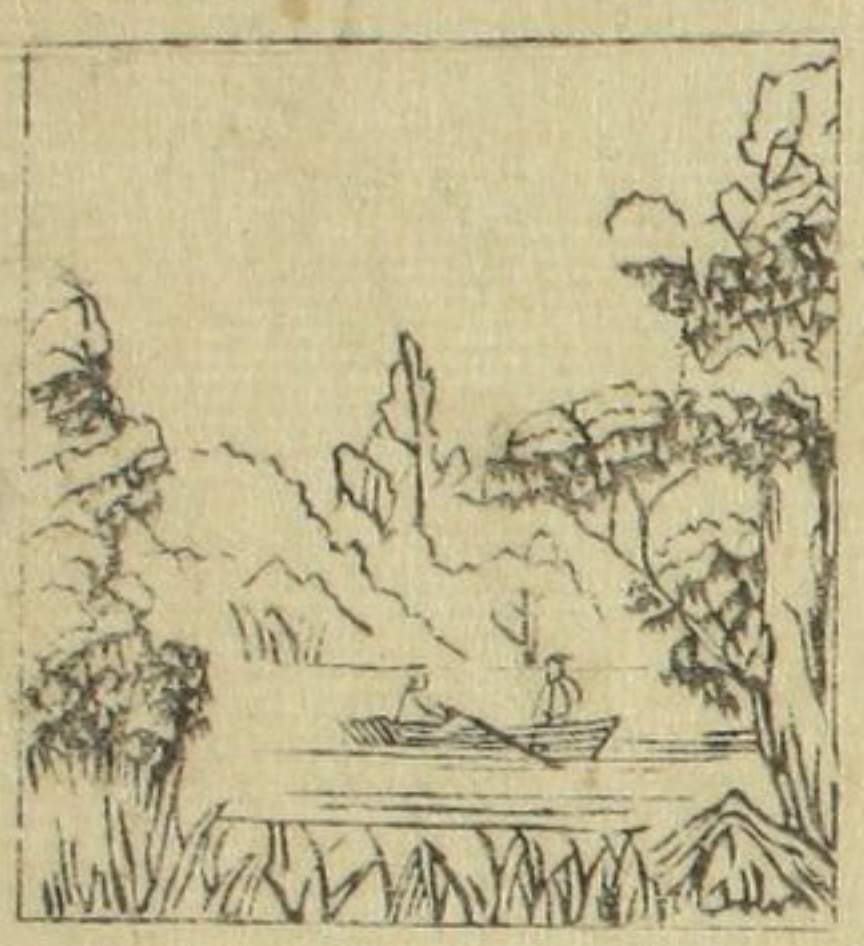
此圖ハ、林中の湖なり、此水
ハ、陸地全ク四面を圍みた
るゆゑ、流れ去ることな

今ハ、夏日おりや又冬日な
りや、木葉の茂りたるを以
て、夏日なることを知る。○
冬日ハ、總て木葉なき。○然り多く木葉な。唯



松栢の類のみ、葉あり。○野草ハ、冬日ふても、生ず
る。○否、生ざることなし。

汝ハ、林中ハ鳥あり、又水中ハ魚ありと、思ふや。○
必これあらん、唯明ふ見ることを得ざるのみな



林間ハ、湛へたる水上ハ、數多の水鳥ありて、游泳
せり、水鳥ハ、閑静なるを好むも
の由、其浮べる處ハ、景色甚幽
邃なり。

此圖も亦林中の湖なり、これハ

前示したる圖の湖と同トきく、○然り、同ト湖
 なれども、我が見る所は因りて、異なるなり、
 今湖上は、浮べる舟あり、舟中は、多くの人を載せ
 たり、この人の、携へたる、長きもの、何なりや、こ
 れは、水掉よて、舟を動かすに、
 具なり、○此舟は、何れの方
 へ行くや、と見え、左の方
 行くなり、



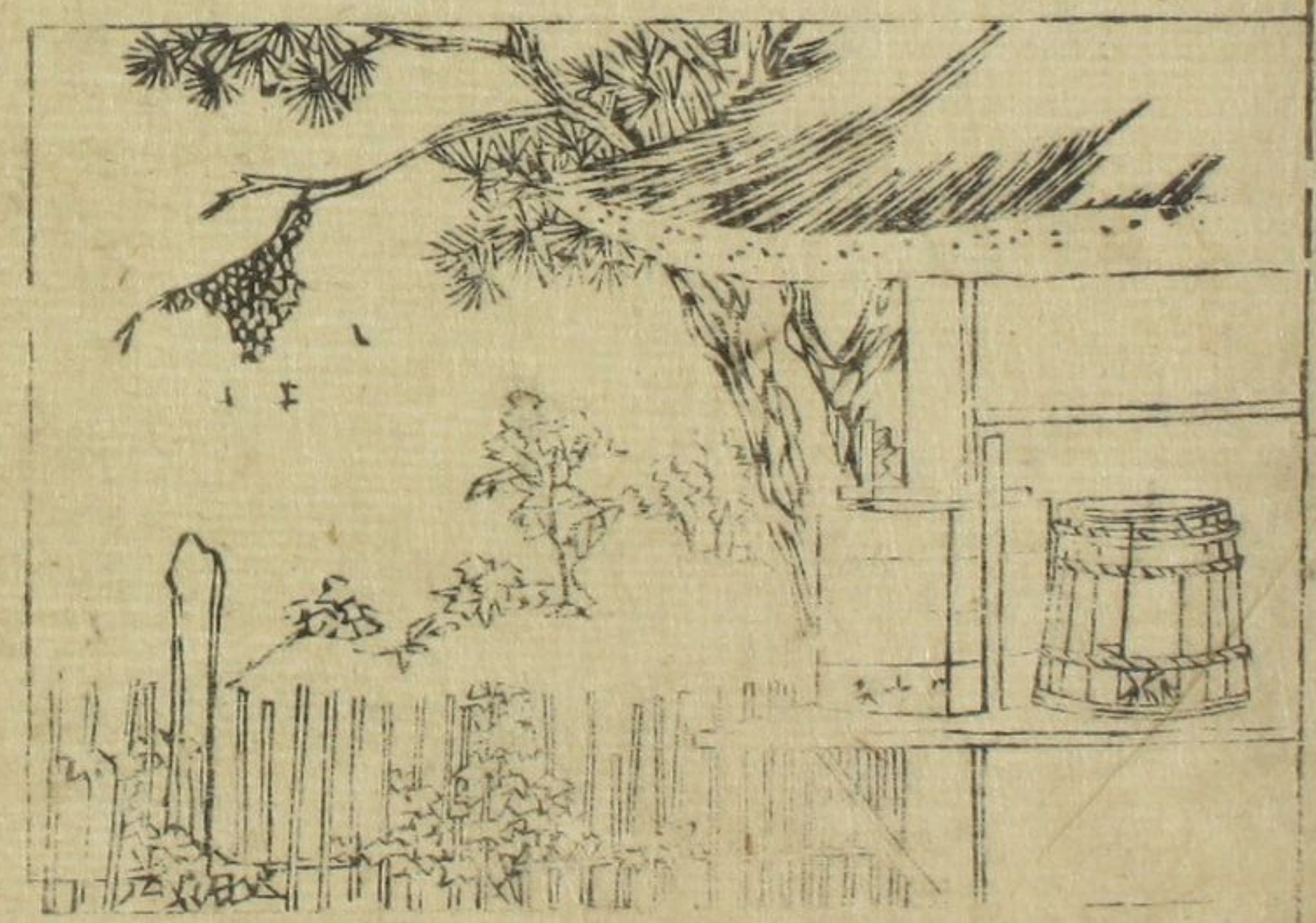
此舟は、前の舟と、同トきく、
 ○否、同トからば、此舟は、前

の舟より、大なり、八人を載せたり、
 何如し、て、舟を進むるや、○此中六人の携へ
 る、櫂を、操りて、舟を進むるなり、○舟は、櫂を、操り
 たる人の、何れの方へ、行て、ぞと、いふ、其後の方
 へ、行くなり、舟の、櫂は、居る人も、何を、爲るぞ
 と、いふ、先の人、水前を、測り、後の人、舵を、操
 れるなり、

第二

此圖も、蜜蜂なり、蜜蜂の、蜜を、巢の中へ、貯ふるを
 見よ、其勤、實に、容易ならざらば、

天地の間、生を稟けた
 るものも、蟲をらも、猶か
 くの如し、況や、人と生れ
 ざる者をや、余今汝等、
 蜜蜂の蜜を貯ふる状を
 語るべし、
 此蜂よも、髮筋の如き舌
 あり、此舌を花の中へ入
 きて、蜜を吸取るなり、
 此蜂、夏の際し、旭の昇るを待ち、巢の中より飛



出種々の花を尋ねて、其中より力の及ぶ限り、
 蜜を吸取りて、歸るなり、
 其際も、何如なる暑き日よも、怠らば、日々飛去り
 て、飛回り、夏の永き日を、一刻の時間、徒に費
 はして、なほ、蜜を、巢の中へ積置ゆ、冬に至り
 て、一種の花無き時よも、食料小乏しきことなり、
 此蜂よも、巢毎、必ず、大なる蜂ありて、これ
 を、蜂の王と、いふ、又、蜜奴として、蜜を取らざる蜂、
 頭あり、此蜜奴を、バ、かの能く勤むる蜂ども、これ
 を、逐出せしめて、共に、巢の中へ、棲まざるなり、

蜂の頭

小學讀本 卷之三 四 大正四年

汝等も幼時より日々勉め勵めて此蜂は取らざ
るやう心がかくべし怠惰ふして其業を勉め
ざること此蜜奴の如しならバ必世間の人も疎
まれて遂は與は交るものもなきに至るべし

第三

人と交るふは眞實を以てして決して虚言すべ
かりば○衆人は對して親切は交り言は必忠信
を主とせしむる時衆人も亦我を愛して其身も自
幸福を得べし
汝も虚言の惡しきことを知りや○然り虚言

の惡しき事ハ屢ことを聞けり
苟虚言をる時人皆汝を棄て顔ざらべし
此の如くなるるときは何を以て身⁺の幸福を得
べき

自其惡しきことを知りて虚言したる後ハ汝の
心は快きや○否快かりん
然らバ汝の心は惡しきことを知りたらん決
てこれを犯さべからば繼令人の見ざる所も
も常は父母教師の面前と思ひて其行狀を慎む
べしこれを獨を慎むといふなり

故に善良よりして正直なる祀ハ、神の助を得て、其身の幸福を享ること疑無し。

若又誤りて窓を破り書を汚し、戸の鍵を失ひ、机

上は墨を翻せる時あど

と父母教師の前は行き

自其始末を訴て、罪を謝

もべし。是唯他人を欺り

ざるのみならず、亦自欺

りざるなり。

自欺うざらんおしを欲



せば、決して虚言をべからず、只此一事ハ、到底善人とならべきの道なり。

人と約して、これは背くを、不善の甚しきものなり。

り、必衆人の擯斥を免を得、故に一旦約して、

言を、務て正實を行ふべし、苟信を、朋友に失はば、

縦令學術に通じとも、生涯身を立つること、能は

ざるべし。

悪事も、小なりといへども、忽ちあすべからば、其

一念、漸長ざるときは、是非を明し、善惡を審み

とるこそ、能はざるに至るものあり、人として、是

非善惡の心無き者あらざれば、常又善に就き、惡
を去り、是を行ひ、非を拒ぎ、虚言せば約束は背ら
ず、其快うらんことを求むべし。心まことお快き
を、意を誠ふといふ、此の如くなるるときは、必衆
人の敬愛を得て、神の助を蒙り、其身は、大なる幸
福を享るものなり。

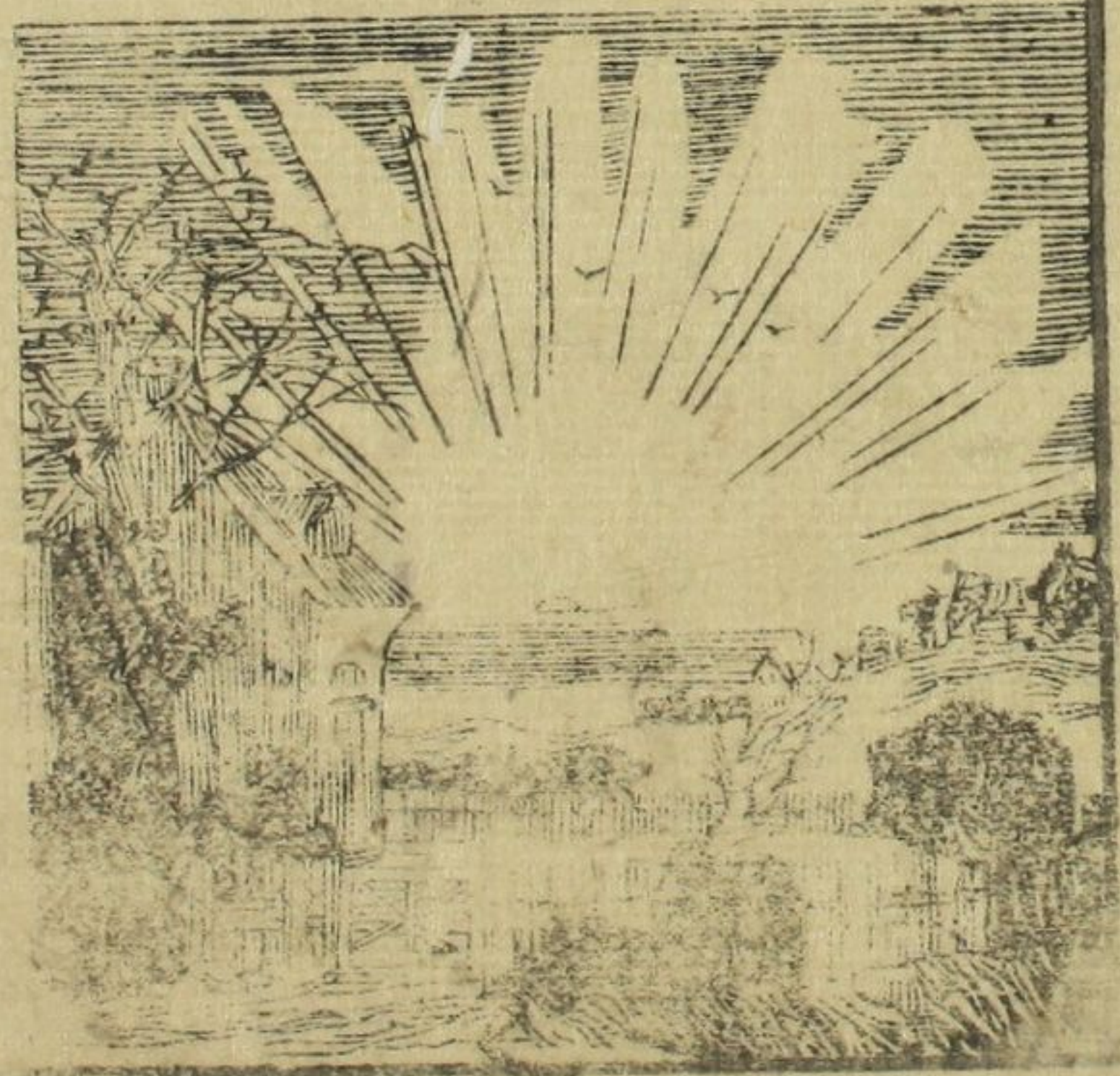
第四

夜將に明けんとする時、雞先鳴く、夜既にお明くま
ば、鳥雀鳴く、
汝も寢所にお在りて、雀の鳴くを聞きしや、此鳥も

夜明けて後、眠ること
あらば、人として、鳥雀
の劣るべからず、故に鳥
の聲を聞きしとき、直に
起き出つべし

神に晝間人々も、日光を
與へて其業をなすも、便

むらむ然るも、夜明けて後まで、猶寢所にお在り
て、神の恵を棄るなり、故に汝等、必夜明けぬれ、
直に起き出づる業に就くべし、これ身を立つる



の初なり

幼稚のものに、夙ふ起きて、勉強し無益な時を費すことなげまば、その習性となり、壯年の後、業を勉むるよも倦怠の心を生むるおとなり。夫神も、必勤むる人ふ、いらざれど、妄に物を與へ、以て、勤むまば、物を與ふるものなまば、身の勉強は、幸福を生む、母なりと知るべし。されば人々、能く勉強して身の幸福を求むべし。勤むれば、必功あり、惰まば、必功なし。今日勉めば、とも、明日ありと云ふことなり。是、今年學ぶすと

も、来年ありといふことなり。光陰を矢の如く、一度去りては、復還らず、壯年に至りても、一業一事を習ひ得ることもなく、遂に貧窮困苦に陥るも、皆自招きの禍なり。

第五

二人の童子あり、共小野に出で、樹陰に息へり。木の地の野草、灌木、茂まるを以て、氣候の夏なることを知る。一人は、一卷の書を開きて、こゝを讀み、又一人は、坐して、其文を聽くことを、喜ぶ。似たり。我、其聲

を聞らざれども、今其顔色を見て、其心、喜べることを知り、○何よ、りて、喜悅の心、顔色、形たる、や、○微く笑へる色あるを以て、其喜悅の心あるを、知り、人、口を開らずとも、其笑を含める、心、喜のあるを、告ぐる、如く、顔色、喜怒哀を、人、知らむる、徴、なま、なり、



凡、喜、怒、哀、樂の情あまば、如何、これを隠さんと、たるとも、顔色の徴、覆ふべからず、されば、人、對して、不平の心を、懐ふ、親切、遇、せ、何となれば、も、我心、毫も怒を、ふく、み、又、不平の心あまば、必、顔色、形、る、者、なれば、なり、其他、或、不幸なる、とき、或、を、倦怠、せ、る、し、き、皆、其、心を、顔色、形、して、人、知ら、ぬ、ぎ、る、こ、と、なり、

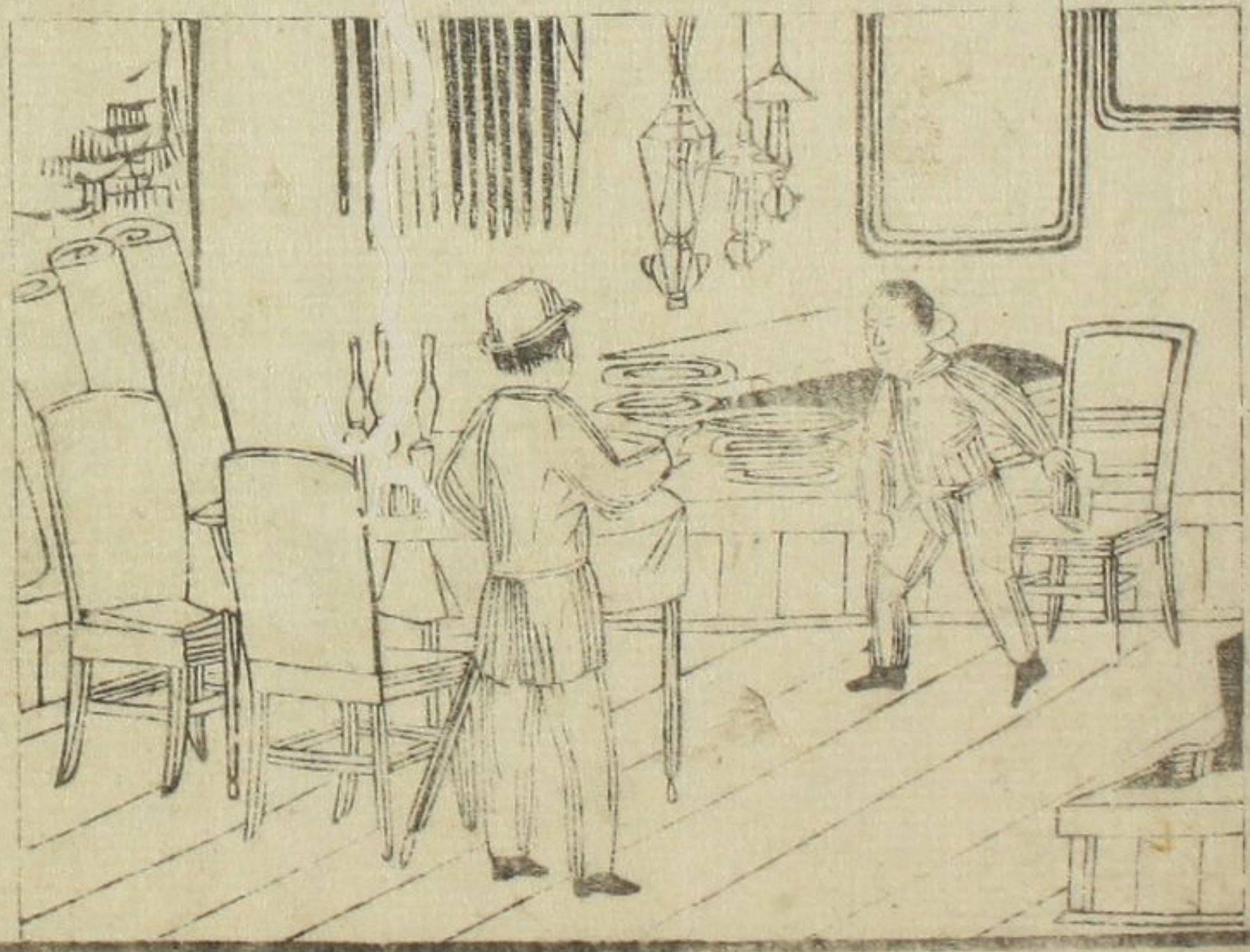
第六

凡、世間、ある、人、を、貴、き、も、賤、き、も、父、母、より、生、ま

れざるはたし、故に父母に、我身の、出で來し本を
 とべ、本を忘るまじきことなり、況てや養育の恩、
 山よりも高く、海よりも深くして、幼き時より、晝
 夜、艱難苦勞して、抱き育てられざるをや、されば、
 深く其厚恩を思ひて、孝順の心怠るべからず、
 子の、父母しつかへて、孝順なるは、神より命とら
 る、務なまじ、これを忘るべからず、苟不孝の行あ
 れば、唯は人の憎を受くるのいならん、必神の責
 を免まざるものなり、
 神よ、我は性命をさづけ、又我を守りて、幸福を興

ふるものおまども、神は代りて、我を養育せし、
 父母をり、されば父母に、神と同しく敬ひ尊び、何
 事も、逆ふことなきを、孝順といふ、
 苟父母の命は、逆ふことあれば、神の責を受け、
 禍は罹るより、父母の誠を、又は身の及ぶざる
 所を、補ひ助くる所にして、即神明の命ありと、心
 得、決して背くべからん、
 昔年一人の男子あり、其人となり、温順にして、幼
 稚のときより、兩親を、孝行たぐひなきものなり、
 き、其家、固富めるは、あらざれども、貧き人を、憐

み、凡て人々交るふ、信實なるゆゑ、誰いふくなく、此男子を善人と呼なせり、幼き時に、近郷の家より、僕たりしが、風ふ起きて、一事一業も怠ることなく、暇あるとき、手習ふ、心を盡し、又好みて、讀書算術を學び、由は幾ならず、利發の人となまり、



主人より暇を與ふるときは、己の隨意に遊ぶことなく、必我家に歸りて、父母の安否を問ひ、終日膝下にて居て、事に従ひ、父母の心を慰むることを勤とせり

主家を出て、後、瑣細なる商をして、渡世せしが人々、此男子の正直なるを知り、其物品を信託けまば、幾もよく稍豊となまり、其後、父を喪ひて、母の老を養ひたるに、晝夜怠なく、介抱して、其心も違ふことなく、假も母の厭嫌ふことをなさず、常に善事を好みて、慈愛の心

禽獸草木まで及びけきば、其家次第又繁榮して
富有の身となれりとぞ、

宜ふり孝ハ、萬善の本といへること、此男子が生
涯の正直、慈惠、學はずして此に至る者、皆孝よ
り生じる所なり

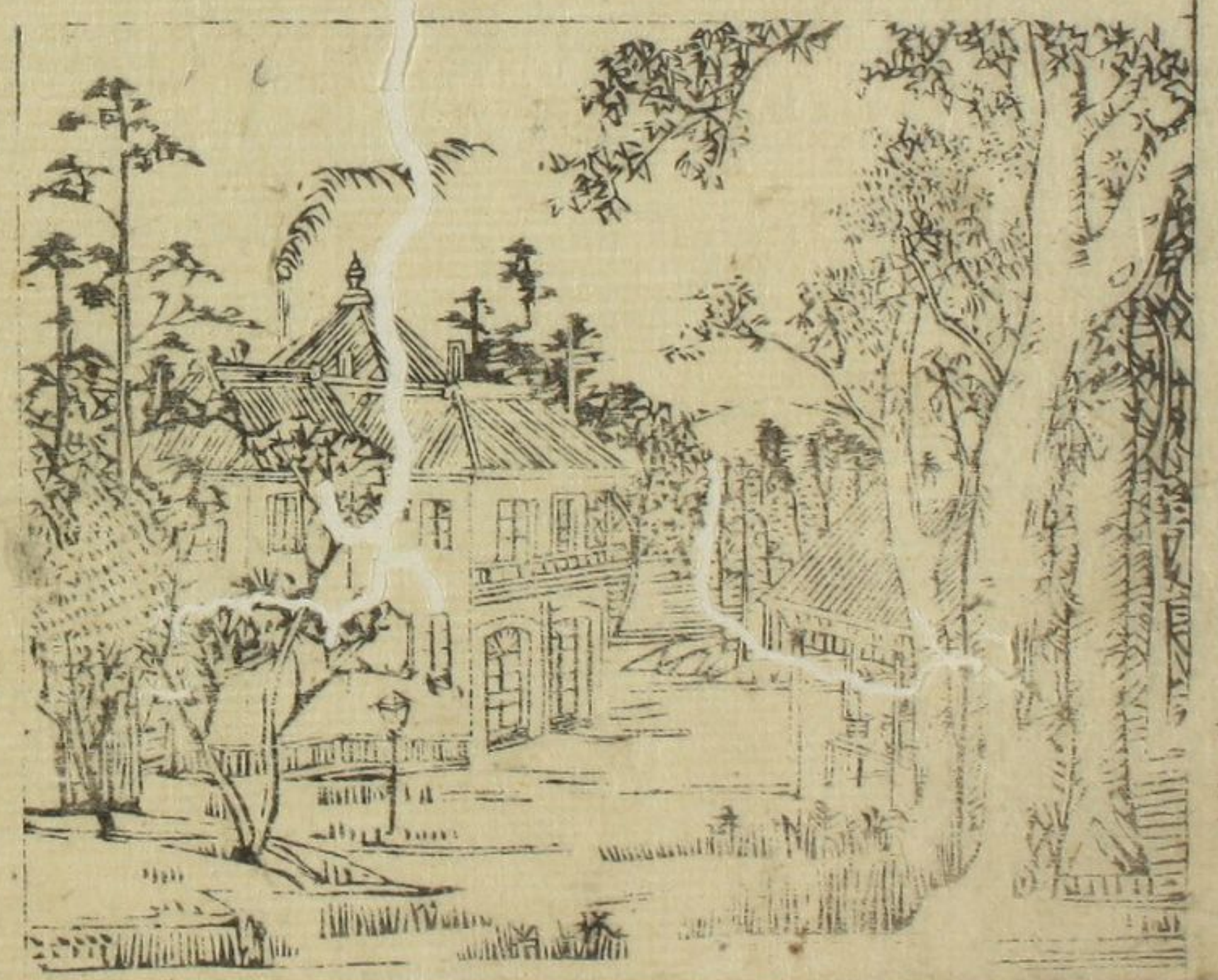
子の父母に士へて、孝順なるべきハ、天地自然の
道として、須臾も忘るべからば、然もども、外物の
為よ、心を奪われて、其道を失ふ者も、少ふらざ
れハ、常又其心を守り、自然の道を忘るべからば、
今日、太平の世に生きて、妻子と與ふ、鼓腹の樂を、

享くること、何の幸り、これ又如らんや、故又宜し
く、國法を遵守して、各其業を勤むべし、凡人の子
たるもの、幼時より、親に事ふること、此男子の如
くせむい、あるべからば

第七

此圖せる所ハ、田舎の富家なり、其四面ハ、茂林
花木ありて、宅前の平地ハ、芝を栽する、好き景
色の所あり、
汝ハ、この家の圖を、能く見て、其様を知るべし、
此屋も、數多の棟々、分をとり、

屋の上より突き出でた
るも烟筒をくり、これ
燧室爐の烟を出だす
たうに設たるより、
凡て物を見るべきい
何の用たることを考
へ、又其形を能く記憶
せしむ、物を見るごと
も其用を考へず、又記
憶せざる人、終身事を識る



、と能てざるもの

たり、

第八



此圖ハ、春日の景色なり、禽鳥も、晴空も、舞ひ、蜂蝶
も、芳草も、戯まじり、
木々、嫩芽を生、ト草ハ、露
葉を發し、看るとして、緑
ならざるべし、總て天
生の物也、春は、草木を
一き衣裳を著るるが如

人の少年も、一生中の春時なれば、才能の種子を
時くときおろし、

少年の時、精神も、充滿し、年數も、未遠けきぞ、勉
學び、生涯の安樂を、冀望し、べし、

少年の時、勉學せざるものも、一年の春時、種
子を蒔くごとし、同ト、生涯智識を開くことな
し、

斯る少年等も、縱令富貴の家、生まるしも、遂に
ハ、必貧窮とならん、

今世上は、富貴ある人と、貧賤なる人とあり、其智

識と、行状とを見れば、富貴なる人は、智識も開け
て、行状も、亦正し、とき皆少年の時、能く勉學び
たるものなり、又貧賤なる人は、智識も乏しく、行状
も、亦正しからず、これ皆少年の時、勉學せざる
ゆゑなり、

されば、人々、幼少のときより、師の教示に、従事し
て、一身、一家を、立つることを、學ぶべし、

師傅と、父母と、替りて、兒童を、訓誡し、善道不逞の
ことを、教ふるものにて、我身は、善教と、學術とを
授けて、我資益を、なほし、由り、父母と、等しく、尊敬

して、其恩を忘るべからず。

第九

人も、萬物の靈なるといへ、禽獸蟲魚と異なりて、能く
真直ふ立ちて、歩行は、獸も、能く物を見、香を嗅ぎ、
聲を聞き、食を味ふるは、人と同くと雖、其歩行を
るよひ、立つこと、能わず、又聲を發せれども、言を
出だして、語ることを得ば、人の能く言を出さず
て、意中を、語ることを得、又能く諸物を推考して、
物理を解す、是其異ある所あり、
そよこの世界は、全く人の住居する爲は、神の造

りたるものにて、世界
を即人の住所なり、
既して人の爲は、此世界
を造り、日あり、月あり
て、物を照らし、また其
目を歡びしむるも、
地上は、芳草を生じ、
花を開き、
人の食物を須むるも
のゆゑ、田野ふ於て、



皇清本

主

穀物を與へ山林に於て鳥獸を與へ河海に於て魚類を與ふ

人々衣服を須むるゆゑ木綿と蠶を生ぜしめ或は野獸の背は長き毛を生じて衣裳を製ることを得しむ

人々家屋を造り又諸の器械を須むるゆゑ土地中より銅鐵などを出だしてこれを造らしむ凡て人の闕しべからざる物々一として與へざることをなす

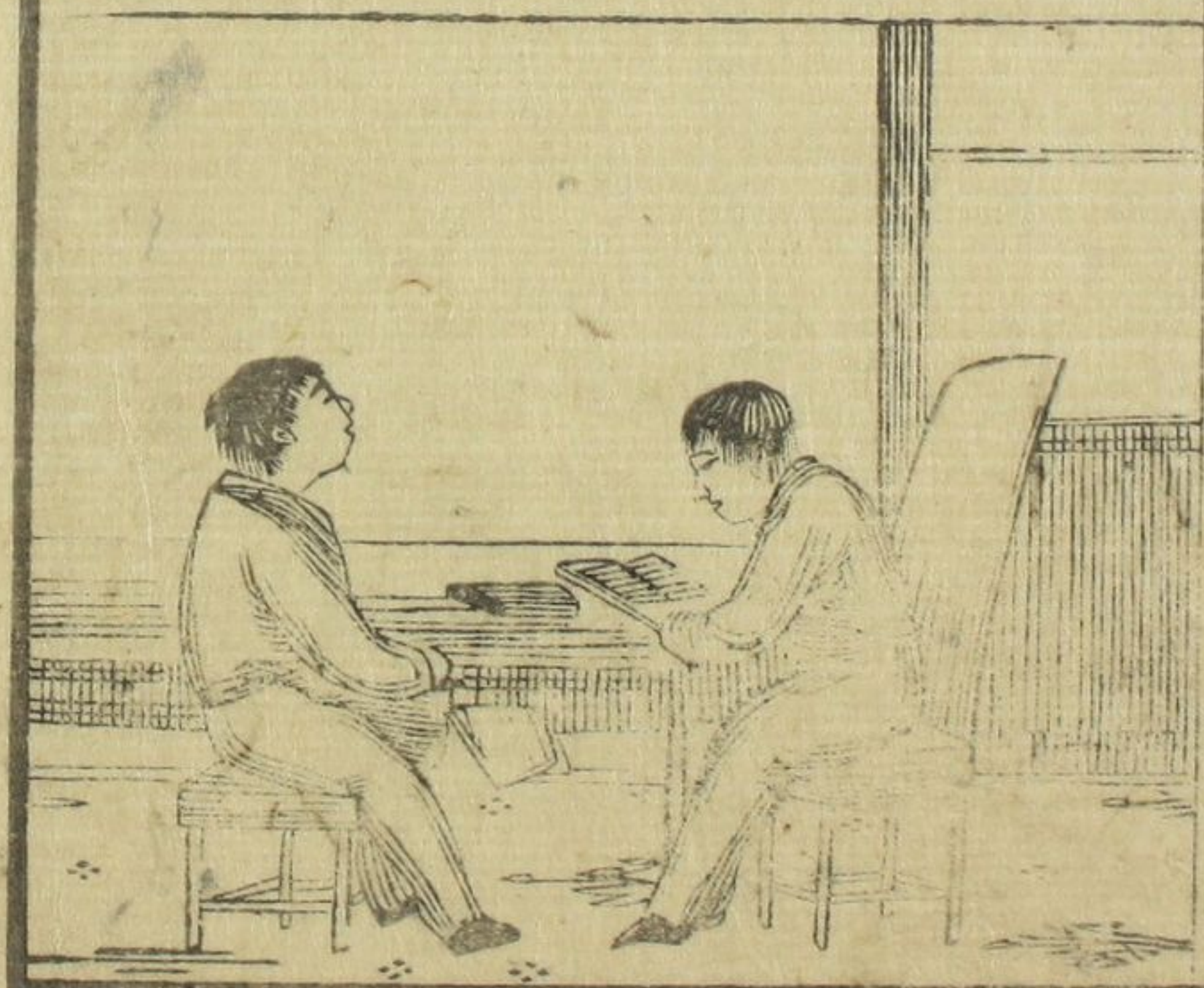
人も一好音を好むとき鳥をれが鳥は歌ひ芳

香を好むとき花をばが為は薫り暑日夏の雷雨あり炎熱これれが為は去り寒天また薪木あり焼きて以て煖を取るべしこれ皆神の賜ものにして所としてこれ有らざるはなし凡此地上及河海の萬物も禽獸蟲魚山林草木の花實に至るまで皆人を養ふる為は神の與へたるものなり神既此諸物を人々與へて足らざるものならしむ故に人々慎みて神の賜ものを受け我身の生活を計るべし然もども悪心悪行の人々此賜ものを受くること

と能たば、生涯貧窮なれば、其安樂を願はん
よ、必勉めて、善を行ふべし。

第十

爰に二人の童子あり、一人は、手小書を持ちて、こ
きを讀めり、此童子は、勉
強して、能く書を讀むと
見えたり、
其書の、久しく用ゐたる
ものなまども、猶新き物



の如し、因りて、此童子も怠惰ならば、又書を
大切とすることを知とり、
彼は、日々學校へ行きて、小學讀本を學び、習ひ得
たる所の章を能く諳誦して、忘るゝことなから
べし。
今一人の童子は、怠惰のものど見えたり、何如
となれど、彼が持ちたる書を悉く汚し、まじり裂
け破きとする由あり、
此童子は、勞して、書を讀むと雖、忘るる處、數箇
條なれば、通して讀むこと能たば、彼は、固書を好

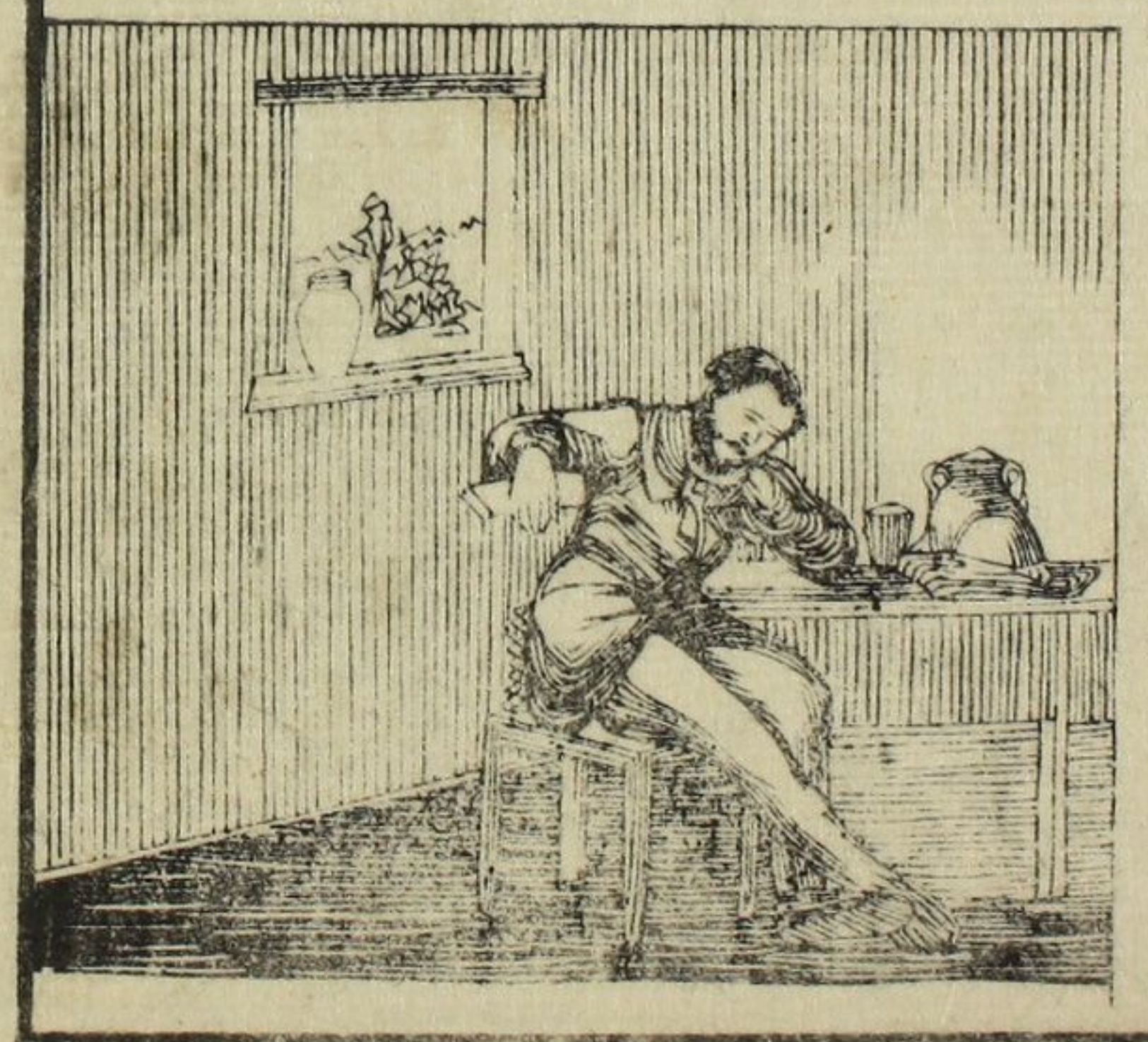
まざるゆゑ、かく學びたる所を、多く忘るゝなり、
 汝、彼の顔色を見て、書を好まざることを知りや、○彼の顔色ハ怠惰なるを表せり、彼も善良より、能く書を讀むことを、好まば、其顔色斯の如くは見ゆることなり、
 善良なる童子ハ、斯る顔色とも、異よりて、必聰敏に見ゆるものなり、
 彼、能く心を用ゐざるゆゑ、其書も、破れ汚れたり、斯る懶惰のもの、遂に困窮卑賤の身とな

るべし、尤誠むべきことなり、

第十一

昔時一人の怠惰なるものありて、常ニ職業をなさば、今これを次の圖ニ示せり、
 此もの、幼稚のときより、怠惰なるものにて、物事は勉強もることなく、己が職する業を爲すこと能はず、晝は徒ら坐する、或唯眠るのみ、
 彼壯年に至りても、猶少時の怠惰を改むること能はず、故に其家貧乏して、衣裳も、帽も、甚古びたり、

彼も好き衣裳を好まざるはたあらざれども金
 なくして何如もぞ好き衣裳を買ふことを得ん
 や、又其業を務めずして、何如もぞ金を得べけん
 や、
 彼も家も妻あり○其妻
 何如ある衣裳を着
 りと思ふや必破まくる
 衣裳を着るなるべし、
 彼も時として少の金
 を得ることあり、されど



も、此金を以て衣裳などを買ふことなく、即時も、
 其金を無益に費せり、今その状を次は説示をべ

第十二

此圖も即前の怠惰ものに
 して今日少の金を得と
 りされども平生酒を好む
 の癖あるゆゑ己の家を
 歸らざりて直に酒店へ行
 きたり、



小學讀本 卷三
 十九
 大正

彼も甚大酒より得たる金の盡るまで酒を止むることあり、

彼十分酒を飲むとき、其心狂亂して暴行をなす、或は路傍に倒れて前後も知らず眠ることあり、

是故に時として必しの金を得ることあれども、飲酒の為にごれを失ひ、衣裳等を求むることを得ば、

此怠惰と飲酒とを極めて悪事よりごれより多くの悪業を生ず、凡て人と大飲すまば、翌日身

體勞とて、職業をなすこと、能はず、職業をなすこと、金を得ること、なすこと、

我日用の品、乏しくして、萬事不自由なり、故に或悪しき道にて、金を得んことを願ひ、

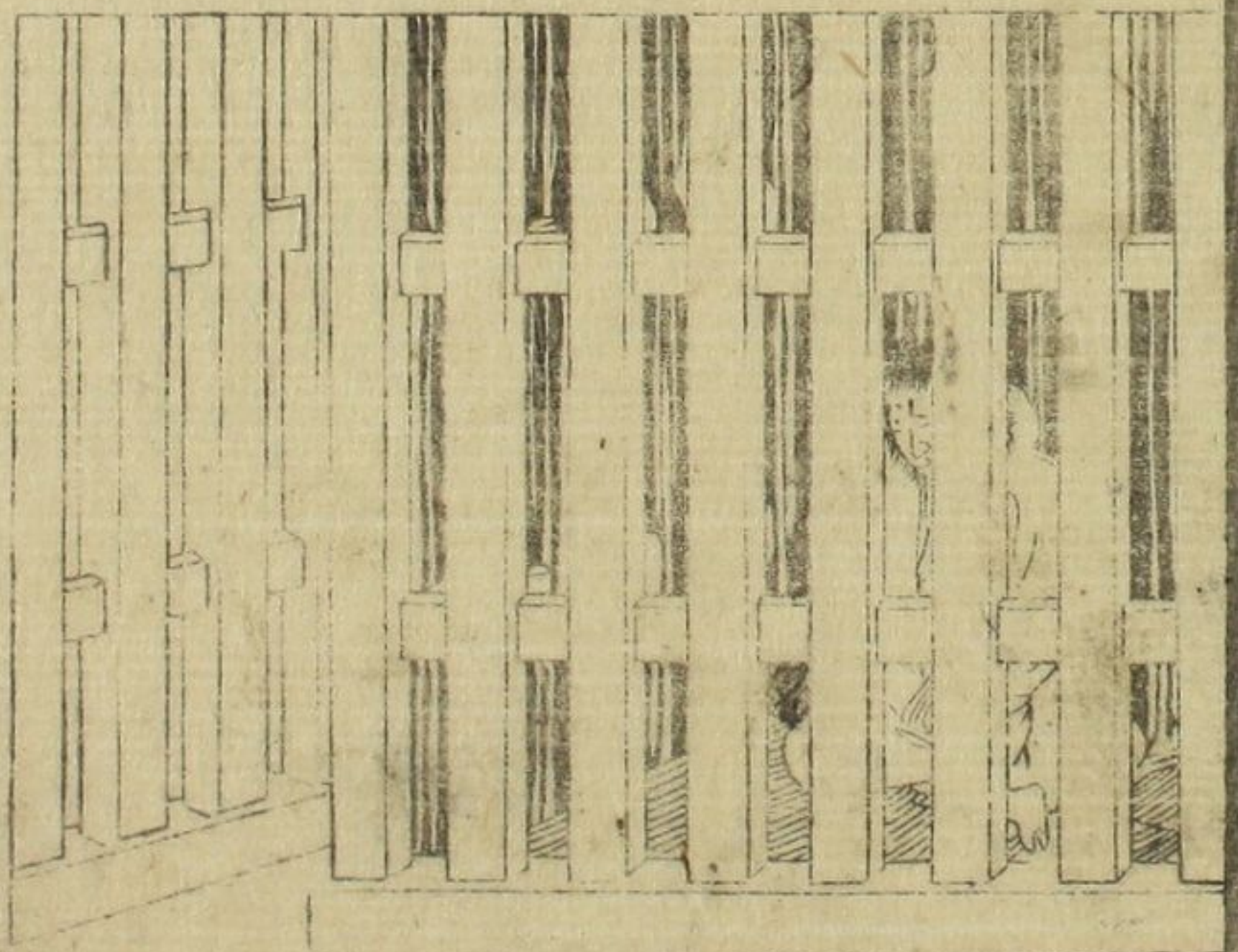
或は欺く、至るものなり、○されば平生戒むべき怠惰と、飲酒なり、

第十三

既に前示する、怠惰人の飲酒すること、益止まらば、毫も職業をなすこと、稀く、職業をなさんと、思ふ心の、生ずること、われども、幼

少より、懶惰に慣らる身ゆゑ、其身をよ、我心は
従ハ一むることも能はずして日々慢遊を事とし
一錢をも得ることなし、
然るども、飲酒の心を止むることを得ば、何如
もして金を得て、飲酒せんと思ふ、一念增長して、
終に悪意を生じ夜々、近傍の家へ忍入り、金銀を
盗取りて、飲酒の料となせり、
斯る悪業をなして、發露せざることも、無けども、遂
に捕られて獄中へ繋らるたり、
此人ハ、斯く獄中へ入りて、藁の上へ居るを以て、

今日に至りては、まよ一
滴の酒をも得ること能
とびして只一人、暗き處
に坐し、絶て、心を慰むる
ものなし、
既に悪事を犯したれば、
今更悔悟をといへども、
身を救ふの術なくして、
終に獄中へ死せり、
家にも妻と小兒あり、其妻を何如とて、身を養



い、又小兒を育つるや、其次第を、次條に説示すべし。

第十四

此獄中、死したる人の妻も、貧き家もありて、小兒を育てんとすも、どもかねて一錢の貯蓄もな
く、又其夫の悪事をなして、獄中、死する程の者
なれば、村里の人々、これを憐れ、助くるものな
し。此故、妻の他人の衣裳などを洗ひ、僅に其日の
活計をなせども、素より女のことあり、多分の金
を得ること能えん、動もすれば、其小兒を、餓え

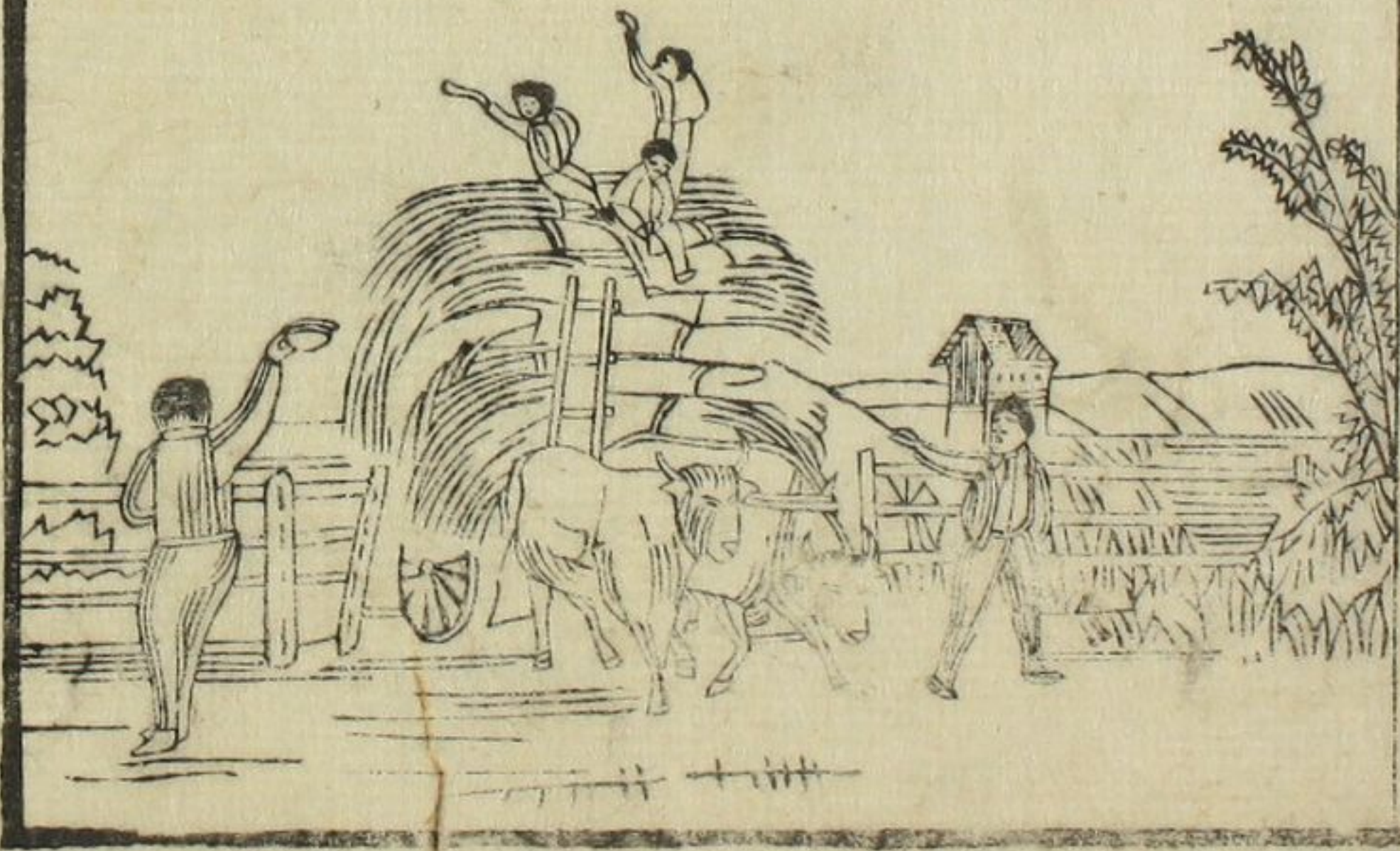
ぶることあるを、如何に
とも、まべきや、あく、日
夜悲歎して、居たり。ダ
終るも、其家も、住み難
くなりて、小兒を携へ、故
郷を立ち去り、
そは酒を、能く人を、昏迷
せしめ、亦人を、狂亂せし
む。○人の、困難なるも、人の、悲歎するも、人の、争論
するも、又無益の言を出だれども、道理なき事を行



ふも、皆酒のなまきりむる、悪業なり

第十五

此圖も、田舎の景色なり
いま畠より穀物を積
たる車を挽きて歸り家
の門より入らんとす
汝も、此穀物を、何なりと
思ふや、○こども、小麥な
り、此穀物も、日は乾く
穂を打ち落し、實と、藁と



を別つ○其のち、磨きて、これを挽き、小麥粉と為
し各家に貯ふ、

此小麥粉は、饅頭、索麵等を、製するに、用ゐるもの
なり、
麥の種類も、小麥、裸麥、大麥あり、是等も、稻、豆、稗粟
等を悉穀物といふ、穀物も、皆動物の食と為して、
身の養となるものなり、

第十六

爰も、一人の男あり、其子兄弟二人を、集めて種々
の、珍しき話を、聞かむ、

父曰、予昔年、此世界を一週せしとき、数多の國々
 あり、種々の物を見たり、一度、甚しき寒國に到
 ることありしが、三個月の間、日光を見ることな
 く、其間に常く夜なり、此國の住民は、雪又ハ氷を
 以て家を造り、人々皆其内に住めり、○兄弟曰、斯
 る國て、何處にありや、○父曰、此國も地球の南極
 と北極とに近き處にあり、
 父曰、予其國に於て一の高山を見たり、其頂上へ
 甚高くして、甚寒し、頂上にある雪は、たえて融く
 ることなからず、人々此山に登るときは、其頂上へ

達せざる前日、凍死す、○兄弟曰、大陽を何ゆゑ
 其雪を融らさざるや、
 又其處は、夏もあらず
 るや、○父曰、其國も、夏
 といへども、我國の寒
 中より、尚寒し、又頂上
 より、火を噴き出づる高
 山ありて、噴き出づる
 煙も、恰も煙筒の煙の
 ごとし、予其煙を見し



小學讀本 卷三

五十五

我が家の烟筒を集めて、一萬以上、至らざれば、
かゝる烟を、出でざるべしと思へり
此父の話は、甚大なることなれども、決して虚言
にあらざり、眞實の話なり、
父又曰、予、大海を、渡るとき、漁師の、捕へたる、鯨を
見たり、此鯨は、殊に大なるものあり、長さ、凡十
間餘あり、體の高さ、三間餘あり、數多の漁師も、
鯨の脇腹に、穴を穿ち、腹中に入り、桶を擔ひて、其
膏を、汲み出だせり、
其他、大なる獸類を、數多見たりと云へり、兄弟の

兒ハ喜びて、父の話、を、聽き居たり、
凡て小兒ハ、謹て、父母の話、を、聽くべし、
それ父母の言、を、我身ハ、益ありて、智識を増し、道
理ハ、適ふものなれば、子とるもの、を、柔順し、
其教ハ、順ふべし、これ、身を立つるの、基なり、
父母ハ、我を、育て、年ハ、長ト智慧ハ、優きたれば、
其教ハ、順ふこと、を、もとより、みて、親の訓誡、を、國
の制律ト、同トく、敬ミ、畏ミ、て、假ヌも、これハ、背ク
べからず、

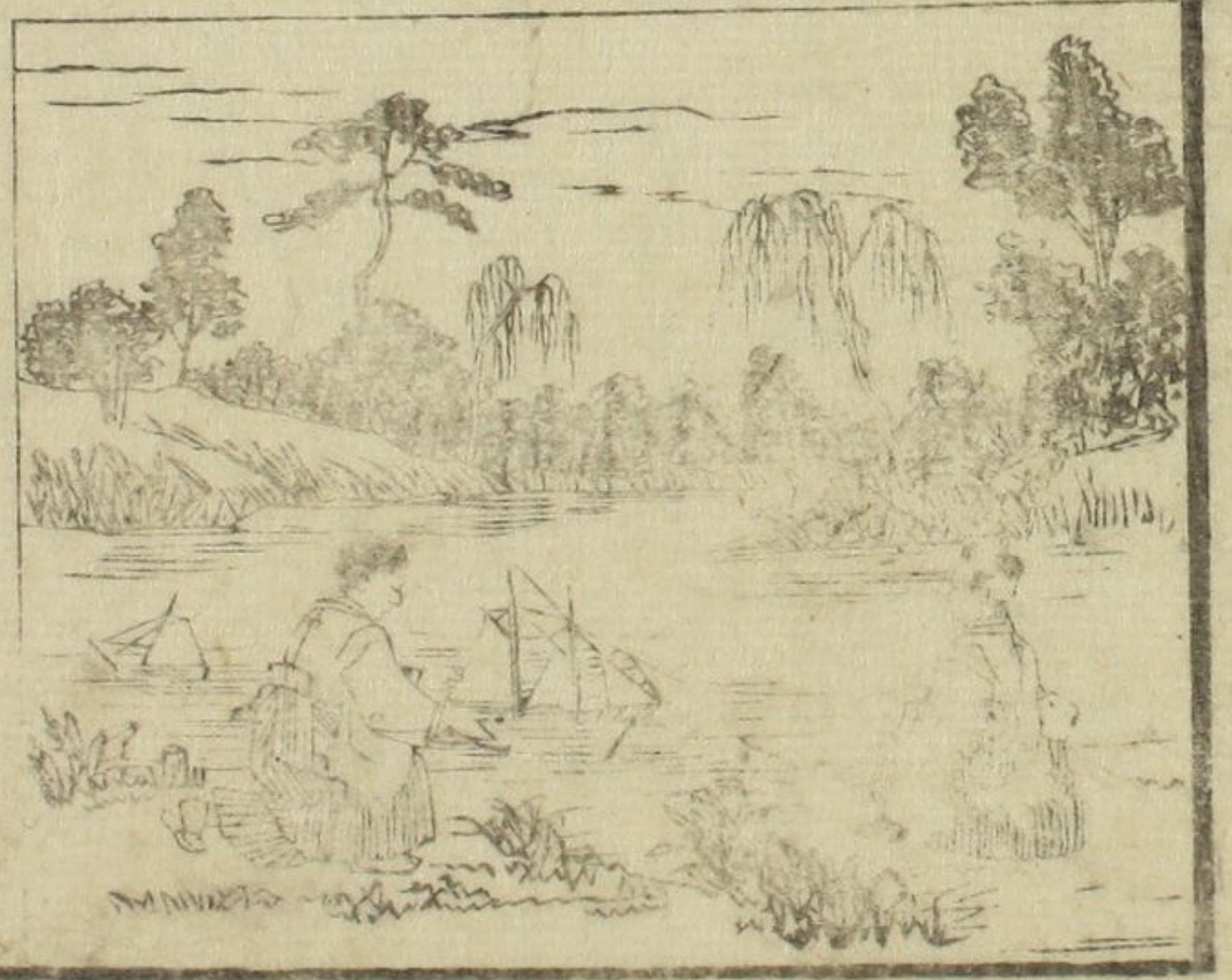
第十七

一女兒池上又、小き舟を、浮べたり、其舟の帆を、只
 一張なり、女兒ハ此舟又、結付けたる、長き紐を、操
 まり、これ舟の、遠く流るる、も、失えざる為なり、
 此女兒の、浮べたる舟ハ、一本の櫓あるゆゑ、又、
 まを、スループと云ふ

凡て舟の、櫓を、帆を、帳り、風を受け、て、舟を行るも
 のなり、大海又、浮ぶる、大船も、同ト、理なり、又一男
 兒も、小き舟を、持ち、て、これを、池上又、浮べんと、
 此舟ハ、二本の、櫓あり、これを、スクーネルと云ふ、
 も、一三本の、櫓あり、これを、トリップと云ふ

なり、

凡て斯の、如き舟を、帆前
 船といふ、帆を、張り、て、行
 る、也、ななり、帆を、麻の、厚
 き織物、にて、造るなり、
 船中、又、て、人の、む、た、ら、く
 處を、甲板といふ、○船の
 首を、艫といひ、船の後を、
 舳といひ、右の、舷を、面楫といひ、左の、舷を、取楫と
 いふ、○船後、又、突き出づ、水中、又、入りたるもの



小舟の

三

三

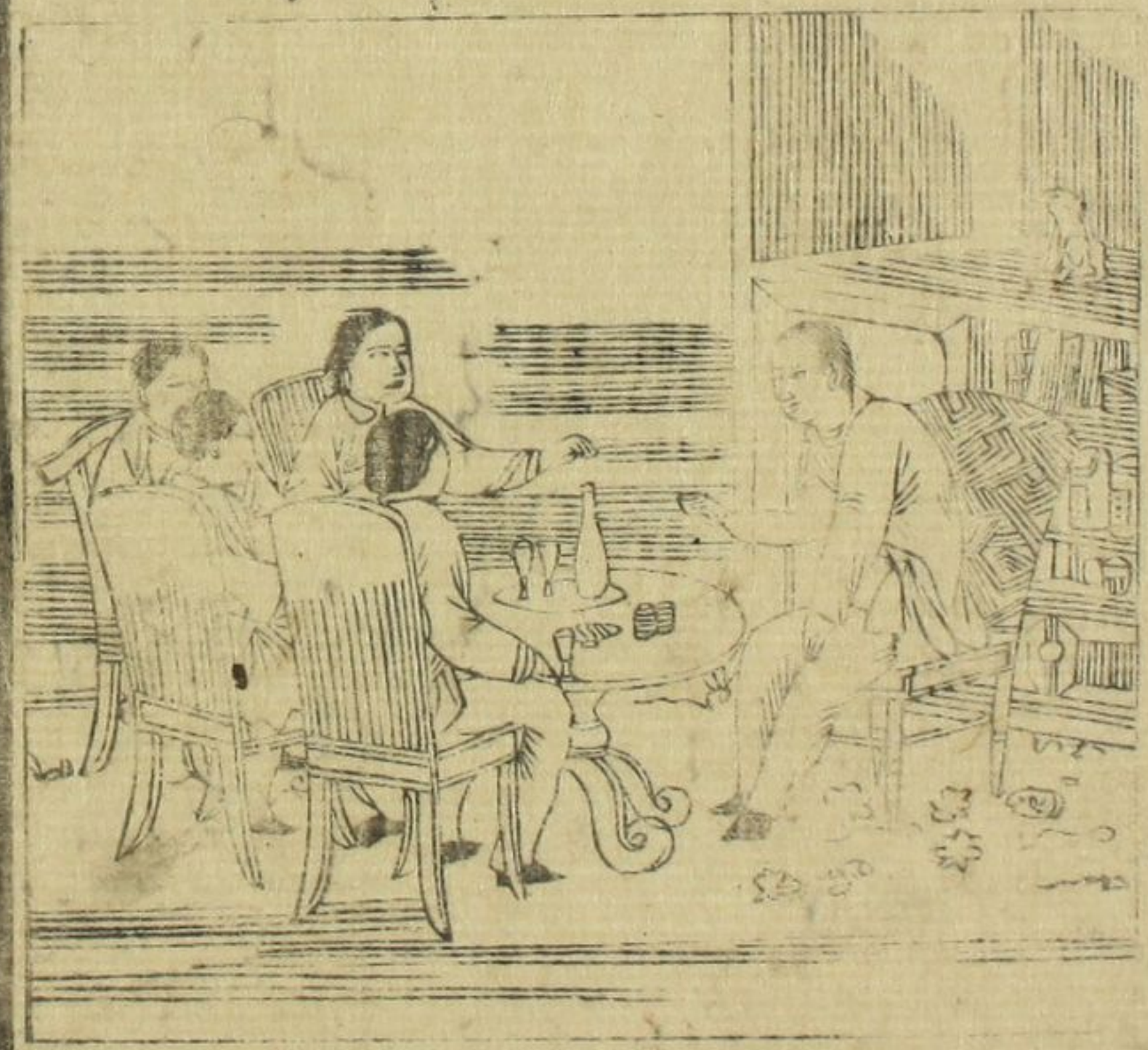
を舵といふ、舵ハ船の行くべき方角を定むるものなり、

第十八

神も此地球を造り人民の生活を為し用ゐる物をば皆此地球上に生ぜしむれば人々其道を盡してこれをもとむるときハ何物も得ざることなり然れども人々の善悪と勤怠と因りて物を得ると得ざるとあり且又人の務は従ひ物を得ると差等あり、
今遊戯のみ耽りて少くも心を他事に用ゐざ

れた此地球ハ徒ら遊戯の場所となるのみ又財を蓄るのみ勞して心を他事に用ゐざれば此地球ハ只財を積むの場所となるのみ
り風車等の機關を設けて世間は利あることを計るときハこの地球ハ種々の機關を設くべき場所となれり
人々能く心を用ゐて世間は利あることを計るべし世間は利ある時ハ亦必我身は利あるものなり此の如きときは此地球を生トする神慮も合ふといふべし

今この圖は、畫けるは、富人、多くの貨幣を出だして、衆人は、示すは、衆人、これをみて、大に感したる所あり、蓋、此輩は、斯る多くの貨幣を得たることをなきゆゑなり、此富人は、嘗て、學校に入り、多年の間、勉強して、百般の學術を覺え、先きは、種々の機關を、發明し、大に世上に、利



益あることを工夫し、今亦其身も大利を得て、斯る富人となりしるなり、富人、衆人に告げて曰、夫との地球は、大活物にして、勉むるは、必其報あらさることなり、人能く勉めて、世に益あることを工夫するは、苦勞する時に其報も必大にして、利を得ること多きものなり、骨折をざる業を爲し、或は只一身に利あることを勉むるは、其報必小にして、利を得ること亦少し、予も多年の間、刻苦して、纔に利を得たれども、今に至りて、猶無益に時を費やすこと

なく亦無益は財を費やをことたり固自勉て得
 たる貨あれは皆我有ふしてこれを費やすも隨
 意なりと雖無益は費やすも正道はあらざ若美
 服を以て人々驕り又僅の貨幣を得るときは心
 は怠を生ずるは實は愚にして且不善あり
 貨幣の最要用ふるは衣服食糧を購ひ或これを
 貧人は與へて其饑餓凍餒を救ふはあり
 貨幣を得てこれを惜し貯へ世間の用は供へば
 又貧人はも與ふることなく又我富を以て他人
 は驕るなるとい愚にして吝なるものあり人必

これを憎み神も必これを罰せん
 之を貨幣も用ふる道は由り善きものとなり又
 惡きものとなり故は道の當否は從ひ利害とも
 は此貨より起るものあり
 故は怠惰にして貧賤なるは實は恥づべきこと
 なれども貨のみを愛着するも害の根原なり人
 々出精して其業を勉め其富を計るべし既は富
 めるは至らばこれを世間の用は供へて貧人を
 救ふを第一とすべし

第十九

平生断えず、業を勉むるに、樂しむらば、又断え、以て
遊戯を、事とせむるも、樂しからば、故に、就業の時、
て、出精して、業を勵し、然る後、不出遊する時、
の樂を、覺ゆるものなり、
就業中、出精せざるべきに、其心は、恥を懷きて、
快ららば、行の、善良あるを、心の快きを得る、良法
なり、怠惰あるもの、心の快きことなり、何とな
と、其行狀の、不善なるゆゑ、又恥づる所あり、
なり、
一事を成さんとせば、必其心を放つことなく、一

時、これを爲べし、或事業多くして、力も餘るく
とあり、
と、怠慢なく、これを勉むれば、必其効あり、
りて、能く成就し、故に、勉むるに、何事も易く、勉む
ざれば、何事も難し、
書を讀まんとするときは、如何に難き所にて、
も、これを止めば、勉強して、得る所あるは、あらざ
れば、他事を爲ることなれば、縱令力は餘る、箇條に
ても、餘念なく、勉強するときは、これを、理會せら
る、ものなり、
苦なれば、樂あらば、勉強の後、又非ざれば、遊歩

小學讀本 卷三 三十一

も樂あらば故に書を讀む時、其文を理解して、
後、遊歩はべし、業をふるとき、其業を成就し
たる後、休息はべし、然るときは、心は恥づること
とふきを以て遊歩も身の攝生となるものなり、
抑、恥も人心は於て感動の大なるものあり、恥を
知るときは、人々、怠慢放肆なることなり、平生事
を行ひ、業を勉むるは、方りて我心は恥づること
なりらんことを欲するは、身を守るの要務なり、
今業を勉めて就らば書を學びて通ぜざるは、大
なる恥なり、もしくこの恥を知りて出精勉強する

とき、業の就らざることなく書の通ぜざるこ
となし、

人の世は生れ來しは天工を助け、國用を資する
ものなるふ、何等の業も、勉めば國家の益をなさ
ざるもの、自禍を招きて、困窮に陥るべし、此等
は天に恥ぢ、人に恥ぢ、又我心に恥づること、大なる

神也、妄に幸福を與へば、人を以て、自これを取ら
しむるものあれば、唯恥を知りて、能く勉強する
者のみ、幸福を得、恥を知らざるものも、幸福を得

ること能はざるものと知るべし、

第二十

禮を教化の本にして、人民の惡念を止め、善心を開き、人道を離れしめざるものなれば、須臾も違ふべからざるものなり、

人性を本善なるを以て、辭讓の心を、有せざるものなり、然れども、人欲の私小由りて、本然の性を失ひ、遂に放肆遊惰のものとなるあり、

人々、幼稚の時より、人欲の私を、克ちて、本然の性より復るべし、父母より事ふるとき、孝養ふるべく、

長上より事ふるとき、恭順なるべし、兄弟の友愛も、朋友の信義も、親族の協和も、皆禮より生ずるものなり、又禮を身を立てるの本なりと知るべし、貪欲の念を肆はさるることならぬ、忿怒の心を、縱はすることとなりぬ、貪欲の念、また忿怒の心あるとき、ハ事を行ひ業を務むるは、當りて正路を得ること、能はざるものなり、
そも貪欲を、私情の惑にして、此念を、肆はさるることを、遂に、殘暴の行を、なれしに至る、又忿怒を、一時の狂疾にして、此心を、抑へざるるとき、遂に争鬪

の端を開くに至る、必竟ハ、皆幼稚のときより、辭讓の心を失ふはよき事なり
古語ハ、謙を益を受く、満を損を招くといへり、終日業を務むまじ、心中ハ、爽快を覺え、今日遊怠ふれば、翌日繁忙の愁あり、古語ハ、終身道を讓るとも、百歩を枉げば、終身畔を讓るとも、一失をばといへり、是禮讓の得ありて、損なきを諭せるものなり、

第二十一

昔一人の童子あり、天性至孝にして、善く其母を

事へ、毫も其命を違ふことなし、母事を命ずる母は、且立ちて、これを行ひ、常々念らば、嘗て紡絲を繰りて、絲環を紆ふことあり、其子命じて、紡絲を手を掛けしむ、童子も、絲を紆ふるの間、過りて、これを紛亂し、解けざるゆゑ、急ぎこれを解うんとするも、却りて、緒を失へり、童子既にして、一の緒を求め得ざるゆゑ、頻りにこれを引けり、益固結して、復解くべからざり、遂に因りて、更に狼狽して、一線を断せり、母これを止りて、曰、汝過まじ、此の如くする時ハ、適は其



人世の業を務むるは、猶亂まるとる絲を理むる
 如し是は、監り宜しく汝の終身を計るべし世に
 處し事小臨して、苟私欲、忿怒、惑ひ己の血氣を

紛亂を益ものみ、警汝が
 心を静り、思を平よして、
 正き緒を求むべし既し、
 正き緒を得まば、亂れと
 る絲も、自解くるものな
 りと、

母又童子に告げて曰夫

抑へされば、縱令苦心焦思して、其力を盡せとも、
 徒ら勞りて、功なきのみと、

川合總治郎